男女共同参画社会の実現に向けて

らぷらす

Vol. 88
Jul
2024
Take Free

Interview

被災地支援を続ける「女性を元気にする」を掲げて

俳優・タレント **MEGUMI**

P.5
らぷらすコラム
小川たまか
「平時からの知識、性暴力にも」

P.6
Setagaya Information
女性防災コーディネーターの取り組み

Event Report 開催報告
女性の視点で考える防災・減災講座

P.7
私の居場所 ～らぷらす登録団体紹介～
NPO法人レインボーコミュニティcoLLabo

らぷらす施設紹介

音声コード

この情報誌の表紙には、目の不自由な方などへの情報提供に役立てられている音声コードを印刷しています。
「音声コード」は紙に掲載された印刷情報をデジタル情報に変えたシンボルで、約2cm角の中に日本語（漢字かな交じり）で約800文字の情報を記録することができます。専用の活字文字読み上げ装置を使用して音声で内容を聞き取ることができます。「音声コード」の横には、視覚障害の方が触覚によりコードの位置を把握できるよう、切り欠きを入れています。

らぷらす Vol.88 Jul 2024
編集・発行：世田谷区生活文化政策部 人権・男女共同参画課 2024年7月発行 世田谷区広報印刷物登録番号／第2271号
〒156-0043 東京都世田谷区松原6-3-5 TEL 03-6304-3453 FAX 03-6304-3710 URL https://www.city.setagaya.lg.jp/ 制作：株式会社エイディアン

私の居場所 ～らぷらす登録団体紹介～

NPO法人レインボーコミュニティcoLLabo

「レズビアンや多様なセクシュアルマイノリティの女性たちが、セクシュアリティを肯定し、自尊心をもち、隠すことなく生きていける社会を実現すること」をミッションとして活動している。女性とピア（仲間）の視点を大切にしたプログラムや相談から始まり、講師派遣、研究・専門家との連携なども行っている。今年から多様な女性たちのリアルなライフストーリーを発信する「みらいふ」Webが本格始動。

代表理事の鳩貝啓美さんにお話を聞きました。

NPOになったのは2011年、任意団体としては2009年から動き出しました。以前はゲイの人たちと一緒のグループの中に女性たちの集まりがあったのですが、男性と女性の課題には違いがあり、女性に特化した形でやっていこうと思ったのが最初のきっかけです。また当時レズビアンやバイセクシュアル女性などで集っていた場所がなくなり、自分たちで続けていこうという思いで始めました。

「多様なセクシュアルマイノリティの女性」という言葉には思い入れがあります。始めた当時レズビアンやバイセクシュアルという言葉に対する社会のイメージはとてもネガティブでした。そのような言葉を引き受けること自体大変ですし、ジェンダーの揺らぎがある人もいたのでくくらずに、でも羅列もできないので上記の言葉を使いました。様々な方がアクセスしやすかった、ほっとしたと言ってくださり、当初の想定より間口を広げることができよかったと思っています。

人と違うと気づいた時にポジティブに歩み出せるためには、同じ立場の人がいきいきと生活する姿を見たり、悩みを分かち合う経験をしたりすることは外せないだろうと思います。それがずっとピア（同様の困難や経験をした仲間）サポートを大切にしてきた理由です。しかし、2015年に渋谷・世田谷でパートナーシップ制度ができ、LGBTという言葉が知られるようになっていくあたりで、ピアサポートだけでは足らないと感じ始めました。ピアサポートは原点として残しつつ、その頃から社会に向けた動きを起こす方向に変化しています。

それからコロナ禍にオンラインイベントの参加者から地方での生活を聞く機会があり、セクシュアリティの受容もカミングアウトもしづらく、望まないけれど結婚する人が今もいると知りショックを受けました。セクシュアルマイノリティの女性にこだわるなら東京近郊の人たちで集うだけでなく、ロールモデルなどをインターネット上で発信しようと決めました。今後は、オンライン・対面併用でのイベント開催と、インターネットでの発信を軸にしたプログラム作りに切り替えていこうと思っています。

それに関して、先日「みらいふ」Webの公開を正式に発表しました。今は当事者の姿を紹介しているサイトなのですが、当事者たちの役に立つ知識の発信や、Ally（支援者）の方に対しての情報提供や調査など、内容を充実させていく予定です。またニーズや実態を可視化し、そのデータを利用して行政に働きかけなどしていくことも目指しています。

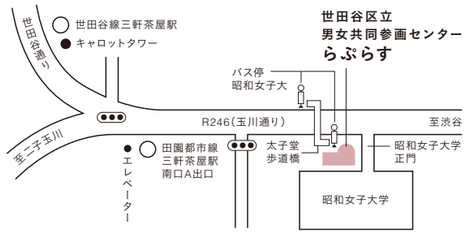
誰の隣にも、カミングアウトしているいないに関わらずセクシュアルマイノリティの女性がいると思うので、ぜひ私達の声を聞いていただきたいし、サイトもご覧いただけたらなと思っています。

coLLabo HP：https://co-llabo.jp/　「みらいふ」Web：https://miraifu.co-llabo.jp/

らぷらすは、男女共同参画社会実現のための拠点施設です

世田谷区立男女共同参画センターらぷらす

さまざまな講座・イベントを開催しているほか、生き方や働き方などに関する電話や面接での相談も充実しています。３階情報・交流コーナーは、予約なしで打合せや読書などに使えるスペースで、無料Wi-Fiも整備されています。



電車：東急田園都市線・世田谷線「三軒茶屋」駅下車徒歩7分
バス：東急バス・小田急バス「昭和女子大」下車
小田急バス（駒沢陸橋～北沢タウンホール）「三軒茶屋」下車
※駐輪場の利用をご希望される場合はらぷらすまでお問合せください

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂1-12-40
グレート王寿ビル3～5階（受付3階）
TEL 03-6450-8510　FAX 03-6450-8511
https://laplace-setagaya.net/

X
旧 Twitter

Instagram

らぷらすHP

世田谷区
SETAGAYA CITY

世田谷区HP
目次から探す → 区政情報 → 施設 → 生活関連（男女共同参画、仕事探し、消費生活）施設 →
男女共同参画センター“らぷらす”のご案内

Interview

MEGUMI

被災地支援を続ける「女性を元気にする」を掲げて

聞き手・構成：小川たまか／ライター

タレントとしてだけでなく経営者、映像プロデューサーとしても活躍の幅を広げるMEGUMIさんは、今年1月の能登半島震災の直後、被災地に入って支援活動を行った。東日本大震災時にも現地で支援を行っており、「自分が現地に行くことで喜んでいただけた経験があったから」という。能登では特に女性への支援に力を入れ、「自分の得意なジャンルを意識して」コスメや下着を配ったり、美容講座を開いたりした。

昨年は自身初となる美容本『キレイはこれでつくれます』（ダイヤモンド社）が50万部超えのベストセラーとなり、今年5月発売の最新刊『心に効く美容』（講談社）も発売5週で20万部を突破し、好調が伝えられている。女性のまだ言語化されていない悩みにまで届くような発信とマルチな活動を支えるMEGUMIさんの信念とは。

俳優・タレント　**MEGUMI**

Profile
1981年生まれ。岡山県出身。雑誌やテレビ番組のほか、多くのドラマ・映画に出演し、2020年2月に映画『台風家族』『ひとよ』で第62回ブルーリボン賞」助演女優賞を受賞。最近では、映像のプロデュースも多く手がけ、コンテンツスタジオ「BABEL LABEL」にプロデューサーとして参加。女性応援ドラマ『完全に詰んだイチ子はもうカリスマになるしかないの』『くすぶり女とすん止め女』（22-23年・テレ東）も話題となった。人生のテーマは「女性であることを最大限に経験し、それを伝え、世の中の女性をしあわせにする」。現在は個人事務所や金沢のカフェ「たもん」の経営も行い、俳優・タレント業のほか、映像プロデューサー、事業家としても活躍中。

撮影：大坪尚人／講談社写真部

被災地でコスメと美容講座「自分のケアで気持ちを明るく」

今回、能登に入られたきっかけや経緯を教えてください。

東日本大震災の時もこのような活動を数年にわたってやっておりましたので、こういうタイミングでこうすれば良いというプロセスみたいなものはわかっていました。私は金沢にカフェを出店していますので、石川県に知り合いが多いこともあって、すぐに行こうと思いました。

直後から現地でサポートに入っていたカタリバというNPO団体の方などから情報もいただきました。「こういうものが足りない」とか、道路の状況なども教えていただけました。市長の方からもOKが出て、プロセスが整ったので行けるなと。行ってみると、東日本大震災のときとはまた全然違うなと感じました。

どのようなところが違ったのでしょうか。

東日本大震災は3月で、寒いけれど、ここから暖かくなるという時期でした。能登は雪が相当積もっていて、まだ冬の寒さは続く。その中でみなさん、洗濯をするために雪を溶かした水を使っていました。

支援物資はどのようなものを選んだのでしょうか。

こういう活動においてやっぱり、自分の得意なジャンルを意識することと必要なものをピアリングすることはすごく大事だと思っています。東日本大震災のときに、外で作業している女性たちが日焼けで肌がバキバキになっているけれど、何も塗るものがないとか、そういう状況がありました。私は周囲にコスメブランドの会社の方やPRの方がたくさんいるので、そういった方々にお声がけして、化粧品をたくさんもらって届けました。それが大変喜ばれた経験があったので、今回もコスメを持っていこうと思いました。

もちろん食べ物や暖をとるものも重要ですが、それを届ける人は他にもいると思ったので、コスメは嗜好品と言われているけれど、女性にとっては生活の中でとても必要なものです。あとは下着やパジャマなど、女性にフォーカスした支援を今回はしようと思いました。

子どもを中心に支援する団体があったり、年配の方向けだったり、それぞれの団体が支援の方向性を決める中で、私たちは女性を中心に支援すると決めていました。

Instagram（画像共有アプリ）には、避難所で住民の方に美容講座を開く様子を投稿してらっしゃいましたね。

そうですね。2回開いて、それぞれ30人ずつぐらいの方が集まってくださったと思います。美容について話す際にきちんとお伝えしたいと思っているのは、自分で自分のケアをすることで、心が癒されたり気持ちが明るくなったりするということです。今回は特に、水も出ないし、化粧品もあるわけではないから、できることが限られていました。私たちがお渡しした化粧品を使ってできることや、自律神経が整うと言われている運動などをしながらコミュニケーションを取らせていただきました。冷えてしまった腰や肩を温める方法とかも伝えました。

参加していただいた方から久々に笑ったとか、気持ちが前向きになったというお声をいただいたので、それはすごく良かったなと思っています。

報道が減った今がもしかしたら一番大変かもしれない

緊急事態の中で美容に関することは後回しにされたり、我慢しなさいと言われたり…ということはなかったですか？

そういう感じはなかったです。ただそこまで手が回っていないだけで。何日も顔を洗えていないことに関して精神的なダメージを感じてらっしゃる方は女性だけでなく、男性でもそうです。日常が全部奪われているわけですから、それを取り戻すためにも必要なことだと思いますし、否定する声は特に聞こえてこなかったです。

洗濯がなかなかできない中だと、下着はいくらあっても足りないでしょうね。

そうですね。たくさん持っていくのももちろん重要ですが、それだけではなく、気持ちが明るくなるようなもの、たとえば少しデザイン性があったり、かわいいと感じられるようなものであったりを選びました。私たちがやっている活動は「気持ちを前向きに」が根底にあるので、少しでもそういうところで気持ちが変わればと。

コミュニケーションを取る中で、避難所での悩みを聞いたりすることはありましたか。

年配の方からは、「ここ（地元）を離れたくないけれど家が全壊でどうしたらいいかわからない」という話を聞くことがありました。また、子育て中のお母さんは周囲に気を遣っていました。共同生活の中でみんなストレスマックスの状況なので、子どもの泣き声などをよく思わない方もいる。それがお母さんのストレスになっていたと聞きました。シングルマザーの方も多くいらっしゃいました。

カタリバさんは、避難所の中に子どもとお母さんの部屋をひとつ作って、そこでは騒いでも何してもいいという場所にしていて、それは素晴らしい取り組みだなと思いましたね。

被災地の支援を通じて、被災地以外の方へ伝えたいことがあれば教えてください。

東日本大震災も、今回の能登半島地震も、マスコミで取り上げられることが直後より少なくなりました。でも現地の方たちは注目されているから頑張れるところも正直あるので、今はかえって一番大変なんじゃないかなと思うんですよね。

世の中から忘れ去られたわけではないけれど、何かこう震災とか復旧は終わったように世間から思われているのではないかと、そう感じていらっしゃる方もいると思います。今ようやくおうちの片付けが始まったりもしているので、今できる支援もあります。直接現地に行かなくても、寄付でもいいし、SNSで応援でもいいし、何かしらやれる範囲の中でやっていくことがとても大事だと思います。

日本は地震大国ですから、明日は我が身ですよね。今回の震災で終わりなわけではないので。助け合う中で、自分がもし被災した際にはこうすればいいとわかってくることもあるので、できる範囲で関わっていくと、お互いのためにとっていいのではないかと思います。

衝撃だった世界最下位の自己肯定感「女性を元気にする」と掲げる理由

MEGUMIさんの美容本はベストセラーになっていますが、伝えたいことがすごく明確で、読み手の方がどんなことを知りたいかをわかった上で情報を届けようとしている印象がありました。ニーズを汲み取るのがうまいというのは、被災地支援の場でも生かされているのでは？ と想像します。

うまいかどうかはわからないですけれど、女性として42年生きてきて、母としては15年やってきて、それから経営者としても働いて、いろいろな立場を経験させていただく中で、大変だと思うことはみなさん共通しているんじゃないかなという実感があります。それは今の歳になったからわかることかもしれません。

自分は表に出る仕事ということもあり、焦点を定めて活動した方が良いのではと数年前から思っていまして、今はすべての活動において「女性を元気にする」ということを掲げています。

「女性を元気に」と決められたきっかけや思いを教えてください。

コロナ禍だったと思うのですが、NewsPicks（経済系ニュースサイト）に出演した際に「日本人女性の自己肯定感は世界最下位」という特集が組まれていたんです。すごく衝撃的だったとともに、そうだよなと思う部分もありました。

日本で女性が生きていくのって大変だよなというのは正直、理解できることだったので。もちろん男性も大変なんですけど、女性として生きてきた自分にとっては、自分のためだけに仕事をするっていうのも、難しくなっていた頃でしたし、このニュースを知ったのもそういうタイミングなのかなと思って、「女性を元気に」を掲げて活動するようになりました。

日本の中での女性の生きづらさについて、どんな部分で感じるでしょうか。

仕事で海外へ行くことも多いですが、他の国にいるとベビーカーを持ってくださる方が当たり前にいたりとか。あるいは日本だと学校選びもなんとなく人の目を気にしてやらないといけないとか、自分の意見をはっきり言うと「女性なのに強いな」と思われたりとか。もちろん私の場合、何かしたらすごくSNSで叩かれたりということもあります。

自分のアイデンティティを出したり、何か新しいプロジェクトを立ち上げると、叩かれたり否定されたり。自由度が低いというか、人に対しての細かい批判がたくさんあると思います。

確かにベビーカーで電車やバスに乗っていいのかどうかが議論になるのが日本ですね。経営者の立場でも感じますか？

そうですね。「なんで芸能人なのに経営もするの？」とか「いろんなことやってるのはなんでなの？」とか、応援ではなく否定するニュアンスで言われたり。映像のプロデューサーを始めたときもそうです。必ずネガティブな声がつきまとうので、私はもう慣れましたけれど、普通はかなりダメージがあるよなと思います。

子育てをしながら仕事を続けるという点でも大変難しいというか、制度が整っていないと思いますし、子育てがひと段落して前と同じように働こうとしてもキャリアが築きづらいとか、そういうことは他の国に比べてあるのではないかと思います。

制度があっても、職場でそれを使える空気がないという場合もありそうです。

海外だと、産休のフォローアップだったり、子どもを預けることに関してもベビーシッターさんを当たり前のように使っていたり。日本だと預けられても罪悪感を抱きながらだったりして、だいぶ違いますよね。

現場の技術職に女性が増えた少しずつ感じる変化

まだまだ大変なことも多い中、ここ数年でジェンダー格差について社会の意識が少しずつ変わったり、女性の働き方についても注目されることが増えたと思います。MEGUMIさんの仕事で変化を感じる部分があれば教えてください。

女性だから意見が聞き入れられないとか、エンタテインメントの世界ではそういうことはないと私は思ってきましたが、変化としては現場の技術職、たとえばカメラマン、音声、録音部の方に女性がすごく増えたなと感じています。

それから日本だけではなく世界的に見ても、女性の映画監督やプロデューサーが入っている方が企画として面白いと評価されたりと、女性がフューチャーされる時代になったと思います。

もちろん何十年も続いてきたことがここ1～2年だけでは変わらないと思いますし、変わるときは大変なことも起こります。でも、たとえばLGBTQやそれぞれのマイノリティ性をもっと自由にアウトプットする、それが選択肢として増えたのが最近だという印象があり、前に比べて良くなっていると思いますね。

最近の撮影現場では、性的なシーンがある際に、演者にアドバイスをしたり、制作側との意思疎通を行ったりするインティマシー・コーディネーターがいるそうですね。

私も何度も現場で一緒にお仕事をさせていただいたことがあります。役者と制作の通訳のような感じで入ってくれますし、言いづらい部分をはっきり言葉にしてくれるので、安心感がありますね。

演出的な部分でも、こういう風に見せたら美しく見えるよと言っていただけたりということもあるので、いてくださると仕事がやりやすい。これからの時代には絶対必要だなと思います。

やりたいことをどんどん実現していくMEGUMIさんに憧れる女性は多いと思います。そんなMEGUMIさんが憧れる女性は一体どんな人ですか？

見た目はモニカ・ベルッチさんで、中身は安藤忠雄さん。安藤さんは独学で建築の勉強をなさって、40代から海外へ目を向けて今も80代で誰よりも精力的に働かれていて現役バリバリ。野心と努力がほとばしっている方で、大好きで尊敬しています。よく本を読んだり映像を見たりして、勝手に励みにさせていただいています。

なるほど。何歳になっても野心と努力を忘れたくないなと思います。ありがとうございました。

否定する言葉に引っ張られずやることから始めてみては

新刊も出されたばかりでお忙しいと思いますが、自分を労るために大切にしていることがあれば教えてください。

ちゃんとしたものを選んで食べるとか、きちんと血液を流すようにお風呂に入るとか運動するとか、ケアは仕事だと思ってしっかりやっています。

プライベートの時間はどのぐらいあるのですか？睡眠時間は取れているのか気になります。

プライベートの時間は……、ないっちゃないですよね。本当に仕事が好きなんでね。ただ、出会ってごはんを食べて仲良くなった人とその延長で仕事になったりということもあるので、仕事かプライベートかわからないけれど、ごはんを食べに行ったりとか、そういうのは多いですよ。睡眠時間も7時間ぐらい、わりとしっかり寝ています。

MEGUMIさんは経営者であり、映画プロデューサーであり、俳優やモデルもされていて、母でもあります。らぷらすは女性の起業支援など、新しいことを始める女性を応援していますが、MEGUMIさんからそういう女性たちに応援のメッセージをいただけたらとうれしく思います。

そうですね、最初から大きいことをするのは苦手と感じている方も多いかもしれませんが、自分のできる範囲でできることを少しずつやっていくことは学びにもなりますし、少しずつの成長が自分にとっての喜びになると思います。

自治体からの支援もあると思いますので、取り入れながら、自分のペースでぜひ挑戦していただきたいなと。

先ほども言いましたが、新しいことを始めようとすると、どこかから否定する言葉が聞こえてくるかもしれませんが、それは逆に自分がチャレンジしているからなので、あまりそういう言葉に引っ張られないで、ポジティブなエネルギーに変換させて取り組んでいただきたいと思います。

『心に効く美容』

著：MEGUMI
講談社
発売日：2024年5月12日
1,650円（税込）

「メンタル強い」「ブレない」と思われがちな MEGUMIが、さまざまな経験をし、10年をかけて、あらゆる美容法を試した末にたどり着いた、心に効く「美容法」と「思考法」を紹介。頑張っている人に寄り添い、優しく背中を押す一冊です。心の危機に陥り、メンタルがどん底だったとき、どうやって乗り越えたか。ここでしか読めないロングインタビューも掲載。

Setagaya Information

女性防災コーディネーターの取り組み

東日本大震災や熊本地震等の過去の災害では、避難所における女性や高齢者・障害者などに対する配慮不足について、課題が多く挙げられました。例えば、避難所において何かを決定する場への女性の参加が少ないがために、女性の意見が反映されない、炊き出しやトイレ掃除を女性が担当しているということがありました。こうしたことを受け、災害時における女性の視点や多様性への配慮の重要性を認識してもらうため、日頃から、町会・自治会、青少年委員など地域の活動に取り組んでいる女性の皆さんにご協力をいただき、1年間防災に関する基礎知識や女性防災リーダーに必要な視点を学んでいただきました。その後、女性防災コーディネーターとして各地域で活動をしていくことで、地域の皆さんにも、多様性に配慮した視点を広げ、災害発生時でも誰もが安心して、避難生活を送れるよう、取り組んでいます。

避難所運営ゲーム「HUG（ハグ）」を活用した研修を実施しています

避難所運営ゲーム（通称「HUG」）とは、静岡県が開発した防災ゲームで、避難者の年齢、性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームです。区では「静岡版HUG」をベースに世田谷区で災害時に起こりそうな状況や多様な避難者（障害者や外国人、妊産婦、性的マイノリティの方など）への配慮の視点を取り入れた「世田谷版HUG」を作成しました。この「世田谷版HUG」を活用し、「多様性に配慮した視点からの防災対策」を普及するため、女性防災コーディネーターが講師となって、町会、自治会や学校など、地域に向けて研修を実施しています。ご興味のある方は、ぜひお問い合わせください。

【お問合せ】世田谷区立男女共同参画センターらぷらす　TEL 03-6450-8510

防災カタログギフト「せたがや防災ギフト」を配付します

在宅避難につなげるため、災害時の備えの支援と防災について考えるきっかけづくりとして、全世帯へ防災カタログギフトをお送りします

対象者	令和6年5月1日時点における区内の住民登録者
カタログ発送	令和6年8月1日～31日　※世帯主あてに、カタログを1世帯あたり1冊郵送します
付与ポイント	1人あたり3,000 円相当のポイントを付与
商品	水、食料 、携帯トイレ、防災ラジオ、モバイルバッテリー、感震ブレーカー、家具転倒防止器具、カセットガスコンロなど
申込	カタログ到着から令和6年11月30日まで　※ホームページまたはハガキで申込
商品発送	令和6年11月1日～令和7年3月31日
お問合せ	せたがや防災ギフトコールセンター　0120-952-200 （平日／8：30～18：00、土・日・祝日／9：00～17：00　※12月29日～1月4日を除く） setagaya-bousai@smart-gift.net

せたがや防災ギフト
ホームページ

Event Report 開催報告

女性の視点で考える防災・減災講座

防災・減災活動や避難所運営におけるアサーティブ・コミュニケーション

2024年3月24日（日）

世田谷区危機管理部災害対策課とらぷらすとの共催で、女性の視点で考える防災・減災講座を開催しました。テーマの「アサーティブ・コミュニケーション」とは、自分も相手も尊重した上で、誠実に、率直に、対等に、自分の要望や意見を相手に伝えるコミュニケーションです。災害時には、女性のニーズが重視されにくいと言われています。女性たちの思いや意見を、防災・減災活動や避難所運営に反映するため、ロールプレイを交えながら自分の意見を上手に伝えるヒントを学びました。また、2024年1月1日発災の能登半島地震を受け、現地に派遣された内閣府男女共同参画局専門職から、被災地の状況も報告していただきました。災害時にどのような問題が生じるか、どのような対策が求められるかを具体的にイメージすることができました。

取組み内容について、詳しくは区ホームページをご覧ください
https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/kurashi/005/003/006/003/d00184986.html

らぷらすコラム

小川たまか

「平時からの知識、性暴力にも」

性暴力を取材していた私が被災地の性被害について考えるようになったきっかけは、「ウィメンズネット・こうべ」代表の正井禮子さんにお話を伺ってからです。

正井さんは阪神淡路大震災（１９９５年）の前から、居場所をなくした女性たちの駆け込み寺のようなスペースを神戸で運営し、震災後も女性だけで集まって語る場所を設けました。そこで、仮設住宅で親切にしてもらった男性から見返りを求めるようなかたちで性被害にあった女性から話を聞いたそうです。

けれどその後、正井さんや、相談電話を受けていた他の女性の話が、「デマ」だと雑誌で報じられたことをきっかけに、被災地での性暴力被害はぱったりと報じられなくなってしまいます。

東日本大震災（２０１１年）が起こった際に、正井さんは女性の研究者から声をかけられ、被災地での性被害について調査を始めます。「今度は流言飛語と言われないように」という気持ちだったそうです。

調査では避難所の居住スペースや共有スペースでの性暴力被害が報告され、女児・男児問わず子どもにも被害があったことがわかりました。また、地位や立場を利用したり、対価型の性暴力被害が多いことも判明しました。つまり顔見知りの人から、断れない状況を利用して被害に遇うことが多いのです。

ただしこれは災害時に限った話ではありません。平時でも地位・関係性を利用した顔見知りからの性被害は、知らない人からの性被害よりもずっと多くあります。平時でも起こるような顔見知りからの性被害が、被災後のような緊急時にも起こるということです。報告書は「災害時には平常時から存在する女性や子どもの脆弱性が増強することを踏まえた措置が必要である」と結ばれています。

阪神淡路大震災の頃はもちろん、東日本大震災の頃もまだ、性暴力被害に対するタブー感は強く、語れない雰囲気がありました。性被害とはとてもレアケースであり、被害に遭うのはとても運の悪い人だという印象で語られてきたところがあります。

けれど２０１７年の性犯罪に関する刑法の改正（２０２３年に再改正）や、その年に起こった「#MeToo」のアクション、最近では自衛隊や旧ジャニーズ事務所の中での性暴力被害が大きく報道されたことなどにより、その実態が知られ始めています。声を上げた人に対する二次加害（セカンドレイプ）は残念ながらまだ存在しますが、被害者への偏見やバッシングをなくすためには加害者が行う性的グルーミング（懐柔行為）や、被害者のフリーズ（凍りつき反応）といった実態が知られることが重要です。

防災訓練があり、防災の知識を平時から知ることが大切なように、性被害に対する知識も平時から必要です。自分や身近な人が被害に遭ったときにどうすればいいか。また、二次加害をしてしまわないためには。それぞれが少しずつでも考えてみることが、誰かを助ける一助になるのではないでしょうか。

小川たまか Tamaka Ogawa／Profile

1980年東京生まれ。共同経営者とともに下北沢で編集プロダクションを2008年に起ち上げた後、2018年からフリーライターに。著書『たまたま生まれてフィメール』（平凡社）、『告発と呼ばれるものの周辺で』（亜紀書房）『「ほとんどない」ことにされている側から見た社会の話を』（タバブックス）、共著『災害と性暴力』（日本看護協会出版会）『わたしは黙らない 性暴力をなくす30の視点』（合同出版）など。2024年5月発売の『エトセトラvol.11 特集・ジェンダーと刑法のささやかな七年』（エトセトラブックス）で特集編集を務める。本号MEGUMIさん巻頭インタビューの聞き手と執筆を担当。

らぷらすライブラリー所蔵案内 Laplace Library

らぷらすで小川さんの著書が読めます、借りられます！

『たまたま生まれてフィメール』
平凡社／2023年5月

『告発と呼ばれるものの周辺で』
亜紀書房／2022年2月

『「ほとんどない」ことにされている側から見た社会の話を。』
タバブックス／2018年7月

『エトセトラ vol.11 特集・ジェンダーと刑法のささやかな七年』
エトセトラブックス
2024年5月